

ジュリーは完璧主義者か*

——『ジュリーあるいは新エロイズ』における道徳について——

Julie perfectionniste? : Sur la morale dans *Julie ou la Nouvelle Héloïse*

ガブリエル・ラディカ
永見文雄 訳

要 旨

クラランの「失敗」の分析をジュリーの最後の悲しみの上に根拠づける注釈者たちがいる。しかしこの時彼らは小説で感じ取れる、物語に沿って女主人公を変容させる時間の経過というものを考慮に入れていない。『新エロイズ』はなるほどルソーの認める通り派手な筋立てのない小説だが、しかし個人の変容と人物の同一性との間の関係を理解する特権的な場なのだ。ところでこの小説におけるこのような変容の研究は、変容の道徳的な、よりの確に言えば完璧主義的な次元をあらわにする。ジュリーの完璧主義という仮説によって、道徳上の実践的で文脈内的なこの観念の仮説によって、この小説の倫理的寄与がどの点にあるかを理解することが可能となる。それは書簡の中から集められた硬直した理論的な教えの中よりむしろ、小説の進行の統一性の中に、ジュリーの道徳的探究、すなわち対話による反省的な探究の方法の中に存在している。

キーワード

歴史性、時間、変化、同一性、完璧主義

ジュリーは小説の結末で幸福になるのだろうか？ クラランであれほど入念に組織した生活に成功したのだろうか？ こうした問いの提出の仕方が正しいかどうか自問せずに答えを出す人たちがいる。ジュリーの「失敗」を引き合いに出し、幸福がもたらす退屈さを断言するジュリーの最後の証言をその証拠とする人たちもいる。ジュリーの死を言いたててそれを自殺

かそれに近いものとも解釈する。第3部第18書簡によれば、ヴォルマールとの結婚はサン＝プルーへの愛とは矛盾すべきはずのものであるのに、サン＝プルーに恋をした状態に留まったがゆえにジュリーは失敗したのだとする。これらの解釈は時にジュリーのいわゆる失敗をヴォルマールの失敗や彼の家庭のユートピアの失敗と結びつける。

こうした解釈には共通の特徴がある。悲観的で目的論的なのだ。小説の結末が先行する時間に価値を与えると考え、結末が残りの部分の意味を完全に覆せることを願っている。その上、いかなるタイプの心理学がジュリーに適用可能かを明らかにすることなく心理学的問題提起に取りかかる。実はジュリー自身自分の考えを知るのに苦勞しているのに、本当のところジュリーは何を考えているのか、と問う。マリヴォーと長い小説の伝統のあとでルソーは意識に隠された精神的諸事件の固有の描写を提出しているのに、抑圧のフロイト的モデルに対応する無意識をジュリーに当てはめようとする。のみならず、これらの読解はジュリーの失敗を彼女が試みた変容の失敗に帰する。サン＝プルーに恋をしたままのジュリーは最初の愛を克服することができず、同じままに留まったというわけだ。

ジュリーは一体どうなったのか？ この問いが彼女の存在に関するものなら、ジュリーの失敗を主張する人たちは、ジュリーはサン＝プルーへの恋に落ちた時にそうであった以上にはなっていないと、自明の理に反して、小説が展開する時間的持続に反して、明言するだろう。この問いが彼女の実存に関するものなら、失敗は次の事実を指し示すだろう。ジュリーはあまりにも整い過ぎた、あまりにも完璧な家庭の組織の中で道に迷ったごとくとなり、この組織は初めメンバー全員を納得させるかに見えただけに一層恐るべき幸福の罠のようなものだったのだと。

ではジュリーは変わらなかったのか？ 「私たちは何だったのでしょうか？ そして私たちはどうなったのでしょうか？」と彼女は問う。この問い

に答えるには、『新エロイズ』のような小説において生成する、あるいは変わるといことが、登場人物たちにとって何を意味するのかを自問する必要がある。批評家たちによればルソーの小説は時間と持続の小説だそうだ。フランソワ・ヴァン・レール¹⁾は主張する。

「この本以前には、小説の時間にはある持続する流れの相があり、主人公たちは自らの本質を変質させることも汚すこともなくその中に浸っていた。行動はある所与の性格から必然的に演繹されていた²⁾。」

ルソーに倣ってジュリーをリチャードソンのパメラと比較すれば、パメラは恐ろしい試練を経験しながら美德の点では変質しないのに対して、ジュリーが作品の間じゅう変容し続けるのはあまりにも明らかだ。

問題はしたがって、『新エロイズ』の登場人物たちにおいては何が変わり得るものであり、何が同一状態に留まり得るものかを知ることだ、ということになる。恋人たちの愛、身体、名前、社会的身分、個性、道徳性といった考察の対象に応じてその答えは変わってくる。というのも、これら個体化のレベル自体が多かれ少なかれ変化するばかりか、その変化ははっきりと区別された可視性と時間性に従いながらなされるからだ。それどころか、可視性の変化は時間性の永続性を一層明瞭なものとする。ところで個人における変化を明らかにすることは結果として個人の同一性の根拠をも同時に明らかにすることになる。小説家でもあり哲学者でもあったルソーは、どのようにして我々に個人の同一性に関する考察をさせてくれるのだろうか。人物の同一性の問題を定式化するのに、ルソーはいかなるモデルを使用できたのだろうか？

この人物の同一性の問題が小説に姿を現す仕方を明らかにするために、人物の同一性のロックモデル³⁾を引き合いに出すことができるだろうか？ロックの同一性モデルは人間の実存を時間の中にはっきり組み込んでいる。ロックは事実、客観的的属性に基づく物質的事物の同一性と、人物の同

一性とを区別する。後者の統一性は、あらゆる観念と想起の間に記憶が提供する意識と繋がりに依存するのだ。あるいはまた、『新エロイズ』における時間の持続の重要性と、著者が物語の厚みと悲壮な執拗さと手紙の濃密さの中にその持続を感じ取らせるやり方を見る時、ルソーによる人物の同一性とスピノザ的な実存観念の間の親近性をむしろ示唆した方がよいだろうか。スピノザの実存観念は特異な本質の積極的で執拗な持続と個人的な時間の持続として理解される。

方法論的な明確化が必要となる。哲学者ルソーは第二『論文』〔『人間不平等起源論』〕で人間の歴史性を強調し、それを可塑的で完成可能な本性に接ぎ木している。また『エミール』では教育の可能性をおよそすべての個人に存在する自然な自己発展能力の上に根拠づけている。なるほど『新エロイズ』は既存の道徳的立場を説明するには向いていないし——この作品はむしろ道徳的規範がどのようにして現れ、登場人物たちによってどのように徐々に評価され選択されるかを示している——、また個人の同一性と変化に関する哲学的学説を提供するのにも向いていない。この著作を形而上学の論文へと変容させるのは馬鹿げているし悪趣味でもあろう。にもかかわらず、それを読めば我々は個人の同一性と変化について教えられるのだ。たとえば個人の同一性はある種の変化を排除しないということが読みながら確信される。同一性は個人の意識の中だけに固定されているのではなく、我々の永続性の証人となり我々の変化の判定者となってくれるように頼むことのできる他者、友人や近親者の現前と返事によっても存在することがわかる。変化については、意志の努力よりむしろ情念の固有の発展に依存していることを読者は知るだろう。

別の時代の心理学の中や、ルソーの思想の圏域の外にある諸問題からというより、むしろルソーの諸概念と共に、そして彼のエクリチュールから出発して、『新エロイズ』において個人の同一性の思想が提示する固有

な点を探究しなければならない。したがってロックとスピノザの二つのモデルは、ここでは、ルソーの立場の固有性を比較によって限定してくれるのに役立つ単なる指標となるだろう。

ルソー解釈がジュリーの変化に反対する議論のパレットを提案しているのだとしたら、そうした議論を提示したあとで、他の著作で展開されるルソーの諸概念を手短に提示する必要があるだろう。それは人間の変化というものについて考えるためであり、ついで人間の歴史性に関するルソーの分析に対して『新エロイズ』がいかなる固有の寄与をしているかを探究するためである。小説のこうした特異性を一層仔細に検討しながら、小説の中で作用している完璧主義という仮説を、すなわち、個人自身の——この場合ジュリーの——生成と同一性に対する当の個人の反省的で言説的で道徳的な関係という仮説を、提案することになるだろう。

1. L'amour ne change jamais 愛はけっして変化しない

「回心」にもかかわらず、サン＝ブルーを遠ざけようとする企てにもかかわらず、ヴォルマールのあらゆる努力にもかかわらず、登場人物の内部と彼らの間に経過した時間にもかかわらず、ジュリーは変わらなかったのだという議論には、多様な複雑さが存在する。L.G. クロッカーはいつもの読解図式に従って嘘と人心操作〔ごまかし〕を糾弾するだけで満足する。他の読者はジュリーの不誠実、行為と言葉のずれがどこにあるかを理解しようと試みる。しかしながらこれらの批評家たちは、問題はジュリーが自分について述べることと本当の彼女の間の認識の次元の完全な一致の問題、すなわち真実性の問題、なのではないということを忘れている。自己との関係と、自己として留まるあるいは変化するということは、むしろ倫理的次元の諸問題に関わっており、意志と熟慮を前提とするのであって、手段としての場合を別にすれば、過去と実体験の認識を必ずしも必要とし

ない。変わろうと努める、多かれ少なかれそれに成功する、しかも成功するためにいくつかの事柄を積極的に自分に隠す一人の女主人公をルソーは示す。この観点からすると、「抑圧」は（エレナ・プルチーニ、ロベール・モーズィ、アンヌ・ドゥネ・テュネーらがこの用語に頼っているからだが）単に失敗の用語だけで分析されることはできないだろう。やりおおせた抑圧は、少なくとも抑圧が持続している間は、一つの成功、進歩の一形態ではないのか。なぜならそれはジュリーの態度を変容させクラランに生きることを可能とさせるのだから。

フランク・サラアンは小説の中に現前する諸要素をより尊重した読解方法を提案する。我々に変化を感じとらせる理論は何か？ また変化に対して盲目的にする理論は何か？ 小説を登場人物の出会いとして遠近法的に読む必要があるだろう。彼らは現実について誰もが同じ観念を抱いているわけではないので、彼らの人生に影響を及ぼす変容を同じように考えているわけではない。適切な質問は、ジュリーは変わるのか、ではもはやなく、いかなる人間の理論が彼女の変化を感じ取らせるか、であり、いかなる人間の理論が変化を接近不可能で無意味なもの、あるいは二次的なものとするか、だ。

サラアンの答えは次の通りだ。ヴォルマールは身体と身体が受ける諸影響と個人が異なる身体との出会いによって受け取る様々な思想だけを考察する唯物論者であって、変化を信じる人であり、心の操作によって人間を変容させることによってクララン共同体を定着させようとして積極的に変化を推奨したいと考える人だ。反対に恋人たちの哲学はプラトン哲学であって、そのため彼らはたえず自分たちの魂の考察へと赴く。恋人たちは良きプラトン主義者として自分たちの魂が変化するのも感情が変化するのも目に入らない。しかしはっきりさせておこう。ここではサラアンによれば魂は認識の原理を指すというより、あの生き生きとした想像力の中

枢を指す。想像力にとって時間は進行せず、したがって愛される存在は愛する存在の目にはいつも同一のままだ。ところでヴォルマルはこの障害を突き止めた。彼は恋人たちを現在の感覚の中に、彼が舞台を整えた外部の世界に浸らせることによって恋人たちの想像力と記憶を停止させたいと思っている。反対に恋人たちは自分たちの内部に沈潜しようと努める。サン＝ブルーについてヴォルマルは「彼から記憶を取り除いてごらん下さい。」と提案する。そうすれば「もう恋心を抱かなくなきましょう。」

「あなた〔ドルブ夫人〕が二人の恋人を離別させたあの時が、彼らの情熱が最高度の激しさに達していた時でした。おそらく、あの人たちがもっと長く一緒におりましたら、徐々に熱が冷めていったでしょう。ところが、激しく高揚した想像力が、離別の瞬間の互いの姿を絶え間なく彼らに描いて見せたのです。あの青年は、時の経過が恋人に及ぼす変化を見ていませんから、かつて見た通りの女性として彼女を愛していたのであって、あるがままの彼女を愛していたのではありません⁴⁾」(第4部第14書簡、ヴォルマルからドルブ夫人へ、松本勤訳)。

小説は時間を細分化し分割する諸力を、時間を統一化する諸力に対抗させる。すなわち、変化しつつある感覚と現在を、保存的な記憶と想像力に対抗させる。これらの力は恋人たち自身に反対方向に作用する。彼らはある時は変化を糾弾し確認するが、またある時は周りの変化にもかかわらず再び自らに同一となる。「私にとってすべてが変わった、ただ私の心だけがいつまでも同じで、それゆえにこの身の上がいよいよ恐ろしいのです」(第3部第6書簡、サン＝ブルーからドルブ夫人へ、松本勤訳)。

サラアンの読解は妥当だ。なぜなら小説にポリフォニーを取り戻させているからだ。けれども小説の登場人物をその不動の魂やその永遠化する哲学に還元することはできないだろう。彼らには身体があり、歴史があり、彼らが組み込まれている関係の網の目があり、変容可能な社会的立場があ

るからだ。

こうして、たとえジュリーの愛が持続し、たとえ彼女の魂が愛を恋人たちの物語冒頭の時間の中に固定することを目指そうとも、ジュリーは変化する。そしてその愛それ自体も、たとえ持続しようとも、また持続するがゆえに、変化する。一連の内部の（単に物質的なだけでない）変容が観察されねばならない。政治家や医者が認めるような再生的な危機にも例えられる彼女の「回心」、彼女の家族感情、恋愛感情、宗教感情の進展、そして最後に、最初の熱狂に続くもの憂さ。心情の事後確認された変化であれ（「わたしたちのあいだのすべてが変わりました。どうしてもあなたの心もお変わりにならねばなりません。ジュリー・ド・ヴォルマールはもう以前のあなたのジュリーではありません。この女へのお気持ちを転換なさること、避けられないことでございます。」（第3部第18書簡、ジュリーからサン＝ブルーへ、松本勤訳）、あるいはまた望んだ、時には悲しみを伴った変化であれ、小説中に変化が大量に現前することを否定するのはしたがって不可能である。

2. L'historicité de l'individu 個人の歴史性

実際、第二『論文』と『エミール』の著者が書いた小説の登場人物たちが全く不変であり得るなどと信ずるのは難しいだろう。

第二『論文』は完成可能性の観念を擁護し、人間本性を構成するこの歴史性は個人にも種にも関わると断言している⁵⁾。この概念は、人間が当初は潜在的であった諸能力を発展させることによってどう生成し変化するか、その理論的枠組みを提供する。『エミール』は『新エロイズ』のテキストを一層よく照らし出す。というのも、人間の諸性向と能力をその発展において示す人間学的研究が、『エミール』ではエミールを墮落から積極的に守る道徳的配慮と混ざり合っているからだ。

ところで情念については、『エミール』の著者は一方で探究あるいは嫌

悪という不確定な運動と、他方でこの運動が教育や偶然や人間の行為次第で向けられることになる対象とを、情念の中に区別している。こうして異性に対する愛は、我々を他者へと向かわせる性向がただ一人の人物の上にあまりにも早く固定しなければ、また個人がこの特異な〔単数の〕愛を予め発展している人類への情動的関係の中へとうまく統合することができれば、道徳的なものとされることが可能である。反対にルソーはいくつかの情念の固着の不可逆性を強調している。たとえば自尊心〔利己愛〕やたけり狂った愛だ。ひとたびこうした愛を経験すれば後戻りできないだろう。自然の情念が固定する対象が広ければ広いほど（家族、国家、人類）、道徳的ないし政治的教育は一層よく成功できる。対象が狭ければ狭いほど、個人は孤立したままとなり、同胞たちとの諍いや自分自身の情念の間の諍いを覚悟することとなる。

ところで、マルブランシュとストア派の影響を同時に受けたこのモデルは、『新エロイズ』の中でも働いている。なぜなら恋人たちの愛の情念はそれが向かう対象を拡大と深められた理解の運動の中で徐々に再定義するのだが、この運動はまさしく道徳的なものだからだ。事実、恋する人が美德と完璧さと同時に絶えず見られているとすれば、恋人たちは単に人物を愛しているのみならず、恋する人の人物と同時に彼が身にまとっている道徳的完璧さを愛するのである。恋する人が身にまとっている道徳性の方が恋それ自体より好まれるのはこの点においてだ。「否、ほくが徳を愛さないようになれば、そのときはもうあなたを愛してはいますまい。少しでも卑怯になれば、もう愛してほしいとは思いません⁶⁾」(第1部第5書簡, サン＝ブルーからジュリーへ、松本勤訳)。この過剰な理想化が彼らの愛を守る最良の仕方かどうかはほとんどどうでもよい。『新エロイズ』の中で一つのことが明らかとなる。情念は実際変容するということだ。情念には一つの歴史がある。その歴史は恋人たちの歴史だ。このことが小説という

ものを選んだ理由を大方説明してくれる。したがってアラン・ブルームが『エミール』の中に見出したと述べる崇高化のモデルをジュリーの回心のエピソードと比較するのは正当なことだ。このエピソードにおいては愛の情念は——夫婦の、倫理的な、社会的な、神の——他者性を統合することによって対象を変えているからだ。

しかしながら『新エロイーズ』は調和ある変容を目指して抽象的に考察された一人の人間に対して養育係が展開する努力を我々に示すのでもなければ(『エミール』)、社会の歴史の中での人間の偶発事を示すのでもなく(第二『論文』)、人生に翻弄される個人を示すのでもない(『告白』)。そうではなく、一人の女性が自己に対してなす意識的な努力を、その失敗を、変化の好都合な対象と方向に対するその不確かな気持ちを、我々に示すのだ。要するに、認識と探究と自己形成の同時的な企てを示すのである。

第二『論文』における完成可能性とブルームが『エミール』の中で崇高化として指し示すものは、我々がルソーの人物同一性の観念をロックとスピノザのそれから区別する手助けとなる。ルソーは本性と固有の諸傾向の発展を強調することによって、ロックの暗礁を免れている。つまり、一人の人物が自分のものであると承認する諸観念を相互に結びつけている連関を、偶然性に委ねてしまう危険から免れている。ジュリーの行為は、実存の偶然と個人の意識が登録する想起の単なる連鎖よりずっと強い一つの必然性と一つの統一性によって説明される。ジュリーは同時に本性と個性と歴史を持っており、これらが彼女の人物の統一性に一層実質的な根拠を与えている。人物の同一性についてのルソーの観念はロックのそれより積極的であり、ロックのそれほど理論的ではない。しかし他方スピノザにおける同一性の本質論的モデルは、個人的実存にふさわしい積極性を指し示しながらも、そしてまたロックモデルの弱点を取りつくりろくかに見えながらも、個人的本質に生じて個人的本質が展開する時間は特異性を持っておら

ず、個人的本質を不変のままにすると信じさせるところがある。このことはジュリーが時間の中に存在する仕方を説得的に説明するものともなっていない。

換言すれば、ルソーはロックの場合のような純粋に累積的な時間意識も（事件に集中しているが、それを集めて統合する個人的な実体を持たない）、あるいはスピノザの場合のような純粋に持続する時間意識も（個人の本質に集中するが、それに影響を及ぼす事件には無関心）、その両者の同一性を退ける。前者は人物の様々な変更の間に存在する連関を説明できず——また本性の観念を失い——、後者は個人的な変化を本質の二次的な変更に戻元することによって個人的な変化の思想を取り逃がしてしまう。

もしも同一性がロックの場合のように想起の累積という事柄に過ぎないのだとしたら、『新エロイズ』の登場人物たちはなぜあらゆる種類の告白に身を委ねたり、自分たちがそらんじている人生を友人たちの前で真面目に総括したりするのだろうか？ それらの想起を陳述する必要はなく、ただ所有しているだけで十分なのではないだろうか？ 実際には、それは彼らの同一性が彼らに起こった一連の事件の中にあるからではなく、現在時においてしか価値を持たないような物語のただ中でそれらの事件を捉え返し作り直す叙述行為の中にあるからだ。小説の形を取ることによってルソーは、変容しながらも、そして時間的持続の中に存在しながらも同一のままに留まる個人を示すことができた。なぜならその個人の同一性を支えるのは言説だからだ。

かくして過去に対する関係は主として意識と認識によって維持されるのではなく、努力と自己の捉え直しによってということになる。この努力と自己の捉え直しが過去に依拠するのは、事実上現在と未来によりよく目を向けるためなのだ。「私がなろうと欲する者になるには、過去においてあのような私でなければならなかったのだと感じています⁷⁾」（第5部第3書

簡，サン＝ブルーからエドワード卿へ，松本勤訳)。この小説の完璧主義的次元の仮説が提出されるのは，以上の理由による。

3. Julie, héroïne perfectionniste ?

ジュリーは完璧主義のヒロインか

体験しようと思ったわけでもない様々な冒険に翻弄される憐れなカンディッドやあらゆることが恋の妨げとなる運命論者ジャックから見れば，決定を下し，自らの情念と取引をするかに見え，選択を表明して時間的持続の中でそれを引き受ける，そんな人物としてジュリーは姿を現す。ルソー自ら認める通り，殆ど何事も生起しない小説に関わり合っているとしても，にもかかわらずその主人公たちは大いに熟慮する。そしてその熟慮は主体的変化へと行きつく。

ジュリーは完璧主義のモラルの保持者だろうか？ この仮説は多くの点で豊かなものに思われる。エマソンの自然に関するいくつかの分析がルソーの読者の目にはまったく特別な奥行きを示すということに加えて，『新エロイーズ』には完璧主義にはっきりと見出される自己配慮に似た配慮の様々な様態が見出される。到達すべき定められた完璧さよりはむしろ自己完成の用心深い探究とその永続的なプロセスに関わる自己配慮だ。『新エロイーズ』のヒーローたちがたえず美德を引き合いに出すとしても，この用語に一挙に内容を与えることができるわけではない。この用語はまづもって彼らにとってはかなり曖昧な探究のプログラムとなっている——輪郭のはっきりしない「内的なモデル」なのだ。ところでこのプログラムの文言は彼らの選択と行動によってたえず定義され直される。美德はある時は愛に従うことに存し，またある時は愛を放棄するように彼らを促すだろう。

完璧主義とは（とりわけエマソンとソローの完璧主義とは），正しい行動あ

るいは良い選択に関する問題提起である以上に、サンドラ・ロージェによれば次のような態度を指す。すなわち、自らのより良い状態に到達するために我々がなさねばならないことに集中する態度のことだ。ところで文脈と特異さに注意を払う小説という形式と、陳述の会話的な様態は、完璧主義的態度に特別に適している。

ジュリーの自己に対する関係はこの点で厳密に完璧主義的だ。ジュリーは自己の選択のいくつかをあまりに安易に正当化して自分自身に騙されたいと思うこともなければ、自己の情念が赴かせるものを完全に拒否したとも思わない。真正性〔真の自己との一致のこと〕を推奨し順応主義を断罪するエマソンもこれと別のことを求めるわけではない。

ところでジュリーが結局父の願いに沿って結婚することになる時、順応主義者だというわけではない。というのも、そうした決定をもたらすのは世評に対する恐怖心でも卑屈な道徳至上主義でもなく、自己の決定の結果に対する計算であり、決定が自分の情念と自分をもっとも愛着を感じている情念、すなわち両親への愛とサン＝ブルーへの愛に及ぼす影響に対する計算だからだ。ジュリーは結婚することによって愛の情念を放棄するわけではない。愛の情念により大きな豊かさを付与しようと努めるのだ。というのも、この偉大な愛を悪条件の中で生きるとすれば、遥かに一層愛の情念を放棄することになったであろうから。

したがって逃げることも（サン＝ブルーと一緒に英国に身を落ち着けないかというエドワードの提案をジュリーは拒否する）、非合法状態を選ぶことも（彼女は姦通を拒否する）問題とはならない。

完璧主義の個人は他の人たちによって与えられ、用いられている価値と規範に関心を寄せる。それを自分の責任において採用する前にたえずそれを吟味する。そして必要となればそれから自由になるすべを心得ている。「ミル同様、エマソンとソローは我々のものである生活を、我々が我々自

身の声でもって同意した生活を求めている」とサンドラ・ロージェは説明する。我々に属するものと我々に属さないもの、死んだものと我々の中で真に生きているもの、内部にあるものと私の外にあるものを区別することに、エマソンは留意している。そしてこの三つの区別は互いに補強しあうのだ。同様に、ジュリーが一つの規範に従うとすれば、それは必ず、彼女だけのものとして彼女に属する道徳システムの中にその規範を適応させたからであり、それを正当なものとすることができたからなのだ。

エマソンは我々が行う一切のことを、そして我々が被っていることさえも、自分自身の名前で引き受けることを要求する。

結婚の決定がなされたあとでジュリーの「回心」が起こるという事実は、彼女の態度を不誠実と片付け、自己のえり好みのア・ポステリオリな〔後驗的な〕適応と片付けるには十分ではない。決定的な一致は彼女の欲望と諸事件の一致だと考える代わりに、回心のさなかにジュリーが到達する一致は彼女の存在のすべての部分の相互の一致であり、彼女のすべての感情の間の相互の一致だと理解しなければならない。そして彼女の欲望の暦が外部の諸事件の順序と幾分ずれていてもそんなことはほとんどどうでもいいことだ。カトリーヌ・ラレールは自分がそうなったところのものを受け入れることとして理解される自由を、あれこれになる選択と区別している。

「夫を自由に選ぶ権利をソフィーの両親は躊躇なくソフィーに認めるが、ジュリーの父の社会的偏見はジュリーに対してそれを拒否させる。だからこそ小説があるのだ。愛する人と結婚せずに父が代わって選んだ人とジュリーが結婚する理由を知るのに必要な時間なのだ。しかしこの時間はまた、被った従属を望んだ従属へとジュリーが変える時間でもある。『新エロイズ』は真の自己形成小説であり、一つのビルドゥングスロマン〔教養小説〕であって、そこでジュリーは遭遇する障害を通して自らの自由を創出する。[…] ジュリーの辿った道を追って行くと、この自由はえり好

みや自由意思の単なる表現の領域に属するのではなく、自己への同意、現にある自分になる能力の領域に属することが理解される⁸⁾。」

こうした自己の観念は言説的であるばかりか創造的であって、結局、間主観性において展開される。

しかしそれだけではない。ジュリーが完璧主義者であることを証明するのは、サン＝ブルーが完璧主義者ではないということ、あるいはいずれにしてもジュリーほど完璧主義者ではない、ということだ。サン＝ブルーが最初の形に固定したと思っている愛に自分はもどることはあり得ないと自負しているのに対して、ジュリーはこの情念の様態を人生の時間に適応させることによって多彩にすることをやめようとしな。サン＝ブルーは大きな小人として提示される。第五部冒頭のエドワードの言葉を思い出そう。

「稚気を脱したまえ、友よ、目覚めたまえ。君の全生涯を理性の長い眠りに委ねてはいけない。時は流れ、君にはもう賢明になる時しか残っていないのだ。三十を過ぎれば自分のことを考える時だ。だから自省を始めるのです、そして死ぬ前に一度は大人になるのです⁹⁾」(第5部第1書簡、エドワード卿からサン＝ブルーへ、松本勤訳)。

しかしとりわけ、小説のある決定的なエピソードがジュリーとサン＝ブルーを隔てるものについて我々を納得させてくれる。ジュリーは、サン＝ブルーを同じ道に引きずり込まない限り自分の自己完成の道がすっかり完結することにはならないと考える。サン＝ブルーへの情念に新しい枠組みを与えるためにジュリーが結婚を選ぶのと同様に、彼女はサン＝ブルーを結婚へと誘うだろう。第6部第6書簡の冒頭部は真の完璧主義宣言だ。

「このお手紙を書くにあたりまして、まあなんと楽しい心地のいたしますこと！ 恐れもなく、恥ずかしさもなくお手紙を書けますこと、これが初めてです。わたしたちを結んでおります友情を、たぐいのない心の交流として誇りに思っております。大きな情熱は、これを押し殺すことはあつ

でも、純化させることはめったにありません。名誉が命ずるままに自分たちに大事であったものを忘れることは、誠実で月並みな魂の努力です。しかし、わたしたちがあのようにあって、今このようであること、これこそまこと徳の勝利です。悪徳が原因で愛することをやめるというのはありうることでしょうが、心のこもった愛をそれに劣らずいきいきとした友情に変える原因がいかがわしいということはありません。

わたしたちは自分たちだけの力でこんな前進〔進歩〕をしましたのでしょうか¹⁰⁾？」(第6部第6書簡、ヴォルマール夫人からサン＝ブルーへ、松本勤訳)

完璧主義の勝利、それはジュリーの主張する「前進〔進歩〕」だ。そしてサン＝ブルーは前進〔進歩〕を継続するためにクレールと結婚しなければならない。それがジュリーの計画だ。

「あなた、これがわたしの考えております、わたしたちが危険なく寄り集う方法、わたしたちの心のなかで占めてらっしゃるのと同じ位置を、家庭のなかでも占めていただくのです。わたしたちみんなを結び合わせるでしょう大事な、神聖なきずなによって、わたしたちは兄弟姉妹になるのです。あなたはもうあなた自身の敵でも、わたしたちの敵でもなくなります。この上なく甘美な感情は正当なものと認められて、もはや危険ではなくなります。もうそれを抑制する必要がなくなると、恐れなくともよくなります¹¹⁾」(第6部第6書簡、ヴォルマール夫人からサン＝ブルーへ、松本勤訳)。

ジュリーはサン＝ブルーに熟慮を促す。

「お返事なさる前にお答えをよく吟味なさいませ。一生の境涯がどうなるかという場合、慎重になってとうぜん、軽々しい決断はできません。それに、事が魂の命運に、徳の選択にかかわっておりますとき、軽々しく結論を出すのは罪になります。ああ、わたしのよき友よ、どうか知恵のあらゆる助力を得てあなたの徳を強固なものになさいませように」(第6部第6書簡、ヴォルマール夫人からサン＝ブルーへ、松本勤訳)。

慎重さ、熟慮、先回り、自己の強化。ジュリーは完璧主義の真の聖務日課を述べる。だが何をしても無駄だ。サン＝ブルーは過去の中で道徳的生を送り、最初の誓約に執着したままだ。

「ジュリーさん、あなたはご自分の誓約を忘れると同時に私の誓約もお忘れになりましたか？ 私は、私のほうは忘れてないのですよ。私は一切を失った。私の忠誠だけが残った。これは墓場に入るまで私から去らないでしょう。私はあなたのものとして生きることはできなかつた。私は自由の身で死ぬでしょう。こういうことが約束すべきことなら、今日にも約束いたします。結婚することが義務であるとすれば、人を不幸にしないことはさらに不可欠の義務ですから。また私が別のきずなに結ばれたとして、なおかつ自分のうちに感じるのは、私があえて渴望したきずなに対する永遠の哀惜なのですから。[…] いとしい友よ、どうか私の生涯の安息の依りどころである決意を揺るがせないで下さい¹²⁾」(第6部第7書簡、サン＝ブルーからヴォルマル夫人へ、松本勤訳)。

サン＝ブルーは時間を過去に固定する面影の中で、そして未来が現在からほとぼしり出るのを妨げる面影の中で生きている。ジュリーの忠誠の完璧主義的ヴィジョンが生欲動であるのに対してサン＝ブルーのヴィジョンは死欲動だと主張しても、おそらく言いすぎではあるまい。

ルソーを完璧主義者たちに近づける試みがどんなに説得的なものであっても、その試みは控え目にする必要がある。境界画定を二点引き合いに出すことができる。アメリカの哲学者たちが個人の選択を強調するのに対して、『新エロイズ』においては個人を近親者たちから隔てる境界に対する考察の欠如が、それどころかそうした境界を消し去ろうとする気がかりな努力さえもが、確認される。ヴォルマルとジュリーは一つのきわめて大きな価値を共有しているとジュリーは断言する。そしてこの夫婦が勝利する以前に、恋人たちは互いに相手の意志の中に自分の意志を<預け>よ

うと努めたのだった。ルソーによる順応主義の拒否は、事実、近親者たちの影響を一切拒否することではない。ルソーは無個性な審級として理解された社会の影響は退けるとしても、「心になつた交わり」の影響は受け入れる。

互いに隔たった個人的な生活のリベラルな価値に執着する現代の読者は、クレールとヴォルマールが恋人たちの気持ちを変えようと企てるのを見てぞっとするかもしれないし、恋人たちがこうした努力に従うことを受け入れるのを見てなおのことぞっとするかもしれない。恋人たちがそうするのは、彼らがより良い真正性〔真の自己と一致すること〕の様態を孤独なやり方ではなく、共同で、探究しているからだ。

4. Conclusion 結論

するとジュリーはどうなったのだろうか？ つまり、何が彼女の中で変わり、何が同一のままに留まったのか？ そしてとりわけ、小説はこの二つの次元〔変化と同一性〕を対立させないことを教えているのだから、変容にもかかわらず、そしておそらくは変容のお蔭で、何が同じままに留まったのか？ ジュリーはたえず変化した。こうした変化に着手し、止め、理解したいとたえず願った。彼女がサン＝ブルーに対する情熱を死に至るまで引き受けるという事実は、彼女が変わらなかったと短絡的に言っていることを許すものではない。彼女が追求する変容は自分自身に対する理解と自らの同一性に対する理解の深化なのであって、彼女の同一性は情念と同じ時間的な実存の様態を持っている。

しかしながら小説のこうした完璧主義的な読解は、ある小説の中に完成された哲学を見つけ出したいと願うあらゆる方法の欠陥を提示する。この読解は過度の楽天主義を提示するが、それは人物が自分に対して持っている力についてこの小説が抱かせる楽天主義とは異なる。事実、良い人物に

なりたいためにジュリーが展開する活動は、彼女が完全には統御し切れない一つの情念の偉大なくエネルギーと衝突する。最も大きな変化は望まれた変化ではない。そうではなく、むしろ最も大きな情念が自らを再組織化するのに成功し、実存の新たな様態を自らに与えて執拗に持続することが可能となる時に、この最も大きな情念によってなされる変化なのだ。ジュリーの仕事はこのような変化を最大の権威をもって布告することというより、もっと謙虚なやり方で、それを理解し述べることだ。しかし、意志がそうできる以上に情念が個人の運命を決定するというをひとたび受け入れる時、ジュリーは果たして幸福になるのに成功したのかそれとも失敗したのかを知ろうとする倫理的な問いに対しては、彼女の手紙を模倣することによって答えられるだろう。

「〔あなたは〕どんな人に似たいと思ったでしょう。滅びることのない美の不思議な魅惑よ！ 毒人参を飲んだアテナイ人、祖国のために死んだブルートゥス、残虐な刑を受けたレグルス、臓腑を引き裂いたカトー、こうした徳高い不遇の人があなたを羨望させたのです。あなたはこの人たちの外見の不幸のうちに隠されている真実の至福を心の底で感じていたのです¹³⁾」(第2部第11書簡、ジュリーからサン＝ブルーへ、松本勤訳)。

かくして、人は小説の中のどの人物になりたいと思うだろうか？ 確かにそれほど不幸ではなかったが、しかし『エミール』の表現を借りればさほど「人生を感じる」ことのなかったクレールにだろうか？ あるいは、真面目に自分を取り戻そうと努めながら数多くの変化を体験し、しかも一つの大きな情念に身を委ねたジュリーにだろうか？ とても残念なことは何一つ起こらなかったが胸をときめかすことも何一つ起こらなかったヴォルマールの中に自分を見たいだろうか？ 受動的で、犠牲者でありながら常に情熱的なサン＝ブルーだろうか？ 徳高い人々が自己に満足する至福を感ずるのと同じやり方で、ジュリーとサン＝ブルーの形象は彼らの幸福

が成功や幸運によってよりむしろ感情の強さによってできていることを示唆する。人生の諸々のできごとを情熱的に経験すること、それに身をさらしながらもそれによって変容させられるのを受け入れること、これこそ、幸せだったかそれとも不幸だったかという、おそらくは決定不能な事柄以上に、多分重要なことなのだ。おそらくはそれが、これらの人物たちの実存に自己同一化の欲求を引き起こさせることを可能とするものだ。自分の偉大な小説が読者にとって自己完成するのに役立つようになるためにルソーが頼みにした、その自己同一化の欲求である。

* 本稿は Gabrielle Radica 氏が2015年1月15日に中央大学人文科学研究所で行ったフランス語による講演の原稿を翻訳したものである。〔 〕内は訳者による補足や註などを表す。『ジュリー、あるいは新エロイーズ』からの引用は白水社版『ルソー全集』第9巻と第10巻（1979年、1981年）の松本勤氏訳による。

注

- 1) François Van Laere, *Une lecture du temps dans la Nouvelle Héloïse*, La Baconnière, Neuchâtel, 1968, p. 36.
- 2) *Ibid.*, p. 70.
- 3) John Locke, *Essai philosophique concernant l'entendement humain*, II, 27, § 9, trad. Coste, Paris, *reprint Vrin*, 1994, p. 264 sq.
- 4) NH, IV, XIV, OC II, p. 509.
- 5) *Second Discours*, OC III, p. 142.
- 6) NH, I, II, OC II, p. 42.
- 7) NH, V, III, OC II, p. 557.
- 8) « Locke et Rousseau : la place des femmes », art. cité, p. 98.
- 9) NH, V, VI, OC IV, p. 664.
- 10) NH, VI, VI, OC II, p. 664.
- 11) *Ibid.*, p. 671.
- 12) NH, VI, VII, OC II, p. 680.
- 13) NH, II, XI.